

問題1問1は、棚卸資産の未実現利益控除にかかる連結修正を問う問題でした。非支配株主が存在する中でのアップストリーム取引に税効果を絡ませた問題で、比較的難度の高い領域でいわば直球勝負を求めたところ、かなり多くの受験者が正しい解答をしてくれました。出題者として大変にうれしかったのですが、同時に、この問1で満点を取りながら問題2において比較的平易な問題でも誤解答を繰り返してしまう受験者がかなりいたことに当惑しました。

問題1問2は合併仕訳を求めています。ブランドという資産の登場や商品の評価損などに戸惑われたかもしれませんが、この問題も多くの受験者が正しい解答をしてくれました。自己株式を使用しても、増加する純資産の額はすべての株式を新規発行した場合と変わらないことが解答の鍵になったと思います。

問題2は、いつもの通り損益勘定と閉鎖残高勘定を求める問題でした。クレジット売掛金は最近の検定試験で取り入れられるようになった勘定科目ですが、試験問題としてはカードで売り上げた都度手数料を計上する方法が標準的とされています。しかし、そのような仕訳は煩雑ですので、実際にはカード会社から入金した際に一括して手数料が計上されることが多いのです。その場合、期末のクレジット売掛金に含まれる手数料を費用計上する決算修正が求められます。1(2)ではその処理を求めました。なお、問題の記述からは手数料にも消費税が課されることが明白ですが、信販会社と直接契約していれば消費税非課税となりますので、手数料に対する消費税を非課税として計算した解答も正解としました。

2、は貸倒引当金繰入額がマイナスとなる場合でも費用(つまりマイナスの費用)として処理することを求めています。洗い替えて解答した受験者は、問題を正確に読むことを心がけてください。

4、では期中の商品単価の計算と期末の低価法を結び付けていただく問題を出題しました。商品評価引当金勘定を使用したのは低価法の影響額を勘定残高として表示してほしかったからですが、引当金使用に戸惑った受験者が多かったせいか、正答率は高くはありませんでした。

7、はソフトウェアを見込販売収益に基づいて減価償却をしてもらう問題でした。求めた償却額と年を単位とした均等償却額とを比較してどちらか大きい方を採用することになっており、問題では均等償却額の方が大きく、結果としては試算表のソフトウェア残高を残存年数の2で割ったものが正解となります。

今回100点をとられた受験者が1名おられました。この方の答案は非常に明瞭で読みやすく、出題者としては解答の書き方でもこの方に満点を差し上げたいと思います。そういう気持ちになるくらい、今回も判読が困難な解答用紙に悩まされました。解答は小さな字、薄い字、くせ字ではなく、はっきりとした字をお願いします。また、ゼロ3つをダッシュで省略し、例えば5万を50,ーと書いてこられた方がいます。おそらく実際の仕事でお使いなのだと思いますが、検定試験の解答にはふさわしくありませんので不正解としました。

第195回 上級 会計学

問題1は、前回と同様に、従来どおりの論点を従来どおり出題しましたので、これまでと同じように、出来不出来のはっきりとした採点結果でした。つまり、できている受験生はよくできていたのですが、全くと言っていいほど、解答すらしていない受験生をいました。また、解答に関して、留意していただきたいことがありますので、以下で指摘しておきます。

1つ目は、「述べなさい。」となっていますので、文章で記述する必要がありますが、1. では「・・・営業利益を計算」、2. では「・・・未収収益ではなく未払費用」などとして記述がされていないような、解答がありました。文章として完結していませんので、減点するか、場合によっては、誤答として扱わざるを得ませんでした。また、甚だしいものとして、「未収収益→未払費用」という解答もありましたが、矢印の意味が説明されていませんし、文章になっていませんので、誤答として取扱いました。

2つ目は、1つ目とも関連しますが、主語がない文章も多く見受けられました。なくても意味が通じればよいのですが、主語がないために意味が通じなくなっている場合には、誤答として取り扱わざるを得ません。

3つ目は、専門用語が正確に使用されていない解答が多くみられました。たとえば、4. では「破産更生債権等」を「破産更生債権」、「貸倒見積高」を「貸倒見込額」や「貸倒引当金」と記述するなど、不正確な表現が多くありました。本来ならば、誤答として取り扱うべきですが、今回は、減点するにとどめました。

問題2も従来通りの問題で、穴埋めとともに、特定の論点に関して記述してもらう形式でした。前回(193回)でも同様の指摘をしましたが、誤字や不正確な用語が多くみられました。たとえば、「その他有価証券評価差額金」を「その他有価証券評価差額」、「為替換算調整勘定」を「為替換算調整額」、「繰延ヘッジ損益」を「ヘッジ損益」とするなどです。また、会計上の取扱いの変更の理由が問われている場合、「理論的な」理由が求められていますので、「IFRS とのコンバージェンスのため」というのは理論とは関係のない話ですから、正答にはなりません。また、ここでも、文章として完結していないものが多くみられましたので、文章としてちゃんと記述されているかについて留意するようにしてください。

問題3は、比較的によくできていました。会計方針の変更ですから、前提となる条件と会計処理がどのように変更されるのかを落ち着いて分析すれば、難なく正答にたどり着くはずですが、勘違いされている受験生も少なからずいました。

第195回 上級 工業簿記

今回は問題1で単純総合原価計算における減損費の処理を、問題2で賃金勘定の記帳を、そして問題3では連産品の原価計算を出題しました。いずれも基本的な問題でした。

問題1は、減損費の処理のルールの基本を押さえれば確実に解答できる問題でした。問2と問5の仕訳で、勘定科目の貸借を逆に書いている答案も散見されました。

問題2では、直接工の予定配賦率を定め、直接工、間接工の賃金実際支給額等を集計し、賃金勘定の消費分を計算し、賃率差異を求めることで賃金勘定が完成します。仕掛品や製造間接費の計算を間違えた解答が多く見られました。順を追って解答していけばさほど難しい問題ではありません。

問題3は、問2と問3がほとんどできていませんでした。問2は問題の指示にあるように、全体の利益率を計算し、それを使って各連産品の原価を計算し、分離点後加工費を控除すれば求められます。問3の解答で多かったのが、「連産品の原価計算では価値移転的計算ができないから」というものでしたが、これでは問題文を言い方を変えて繰り返しているのと同じです。なぜ連産品で価値移転的計算ができないのかを説明しないと、この間に答えたことにはなりません。また、「連産品は主副の区別ができないから」という解答も多くありましたが、この間にはまったく関係のない話です。また、多くの解答が日本語の文章として成立していませんでした。主語や目的語や補語がなく、一体何を言いたいのか理解に苦しみました。文章ではなく、単なる文字の羅列にしか過ぎない解答が多くありました。文章で説明せよ、ということですから、単にキーワードを並べただけではダメで、きちんとした日本語の文章で説明しなければなりません。

また、毎回指摘しているのですが、文字・数字が読み取りにくい答案がかなりあります。小さい字、薄い字、汚い字、判別に困る数字等です。今回は特に小さい字での解答が多くありました。簿記は人に読んでもらう記録です。人に読んでもらう、ということ意識して解答しましょう。

第195回 上級 原価計算

問題1は、品質コストの問題でした。品質コストについては、全経簿記上級で複数回出題されているため、過去の問題を学習していた受験生にとって、比較的高い得点が期待できたのではないかと思います。しかし、基本の分類である予防コスト、評価コスト、内部失敗コスト、外部失敗コストを理解していない受験生にとって、この問題は、かなり難しかったようです。そのため、問1、問2、問4の解答状況は、全般的に見ると、それほど良いものではありませんでした。

この問題につき、採点中に気になったのは、次の点です。問1と問2では、各品質コストが「品質コスト総額に占める割合」を問うています。当然、それぞれの品質コストの割合を合計すると100%になります。しかし、各品質コストの割合の合計が100%に満たないような解答や、100%を超えるような解答が見受けられました。また、問3と問5について、問われていることとは異なる内容を記述している解答が多く見られました。その他、問題文中で示している「機会損失」という用語を、「機械損失」と誤記する解答が相当数見受けられました。

問題2は、資本コストの算定を含む設備投資の経済性計算の問題でした。ここでは、設備投資の経済性計算の複雑な計算ではなく、その前提になる資本コストの算定を含めて、基本的な論点を問いました。この問題は、受験生にとって解答しやすかったのではないかと思います。

この問題につき、採点中に気になったのは、次の点です。問3では、問2の解答をもとに現価係数を算定するように指示しています。当然、現価係数は、年数を経過するごとに小さくなります。しかし、年数を経過するごとに逆に大きくなるような解答や、各年の現価係数が1を超えるような解答が見受けられました。また、問われていることとは異なる内容を記述している解答（問1と問5）や、用語の誤記（問2）が、問題1と同様に相当数見受けられました。

問題3は、在庫関連コストについての問題でした。これは、全経簿記上級テキストでも紹介されており、意思決定のための原価計算にかかわる伝統的な項目です。しかし、対応できた受験生は、それほど多くありませんでした。

以上をふまえて、今回の採点を終えて受験生の皆様をお願いしたいことを要約すると、次の2点になります。一つは、会計にかかわるあらゆる試験を受験するに当たって、最低限必要となる姿勢を身につけるようにして下さい。問題1でも指摘しましたが、割合の意味を理解していないような解答や、問題文中にある用語の誤記などは、受験生としての注意に欠けたものであると思います。もう一つは、全経簿記上級を受験するに当たって、事前に準備して受験するようにして下さい。問題1から問題3を通じて述べましたが、全経簿記上級テキストを読み、基本的な知識を習得して、過去の問題を学習するというプロセスに、今後取り組んで頂きたいと思います。